

# しいむじな

特集

## オオバコ



【文献】川名興（1971）千葉県の植物方言 第三報 上、250 pp.

子どもころ、折り取った草の茎を絡めて二人で引っぱり合い、切れた方が負け、という草相撲で遊んだ人もいます。その「葉っぱ」はオオバコの葉で、ゲエロッパ、カエルッパという名はそれと関係があるようです。上の写真はオオバコの花です。後で説明しますが、真ん中がオオバコで左右のものは近縁な外来種の花です。オオバコの花を気にかけることはないかもしれませんが、私たちの足下で普通にこんな花が咲いているのです。そんなオオバコについて紹介します。（尾崎煙雄）

### 房総の山のフィールド・ミュージアムとは

清和県民の森を中心とした房総の山を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」としてとらえる、千葉県立中央博物館が中心となっておこなっている新しい博物館活動です。観察会の開催、君津市立三島小学校の「教室博物館」開設に加え、地域の人々と協働で資料の収集や調査・研究等をおこなっています。

発行

千葉県立中央博物館  
房総の山のフィールド・ミュージアム

連絡先

〒260-8682  
千葉市中央区青葉町955-2  
TEL:043-265-3111  
http://www.chiba-muse.or.jp/  
NATURAL/special/yama/  
2019(令和元)年6月発行



### 観察会報告

#### 山の学校145

4月20日(土)に、清和県民の森周辺の遊歩道で観察会を行いました。参加者は親子連れを中心とした16名でした。途中、細い樹皮などからなる塊を発見。それはリスの巣で、皆さん興味津々に触ったり眺めたりしました。また、コナラの萌黄色や、赤みを帯びたサクラの新芽、針葉樹の深緑など、春らしい房総の色彩を堪能しました。



写真① リスの巣に盛り上がる参加者 (平田和彦)  
写真② 多様な樹木が織りなす春の景観

#### 山の学校146

5月18日(土)に、君津市立三島小学校周辺の里で観察会を行いました。参加者は21名と盛況でした。切り通しの露頭では、学芸員からハンマーを手渡された参加者たちが、「露頭たたき」を体験しました。地層を五感で楽しむ参加者の姿が印象的でした。また、今年、千葉県初記録が報告されたばかりのゴホントゲザトウムシも数多く見られました。



(平田和彦) 写真① ハンマー初体験の昆虫少年  
写真② 胴体が大きなゴホントゲザトウムシ

連載

### 小櫃川流域の生きもの チュウシャクシギ ~ハヤブサから逃げる

五月の初旬、「いい天気、海岸に野鳥を見に行く」と家人に伝えると「天気が悪くなる。早く帰ってきて」と言われました。途中の水田地帯でヒメジヨオンの白い花が咲き、7羽のチュウシャクシギがえさをあさっています。1羽がザリガニをくわえ、頭を傾け、眼を閉じて飲み込みました。数羽のチュウシャクシギが春と秋にこの周辺にいつも休息していますが、他の場所ではほとんど見かけません。「この辺りの水田は、この鳥が通る道？」と思っていましたが、専門家は「ここにザリガニがいるからでしょう」と言います。「なるほど」と思ったものです。

海岸に着くと、黒雲が押し寄せ、白波が立っています。ハマダイコンのピンクの花が風で激しく揺れています。海辺の浅瀬に、約50羽のチュウシャクシギがいます。「こんなに集まっている。珍しい」と思いました。強風に飛ばされないために、皆、沖の方へ頭を向けています。彼らは跳んだり、水浴びしたり、カニを捕ったりして

写真(左):チュウシャクシギ 浅瀬で休息する。  
2019年5月7日 木更津市



写真(右):チュウシャクシギ アメリカザリガニをくわえる。  
2015年5月10日 木更津市

います。平和な光景です。ところが、急に、水鳥が一斉になくなり、しんとになりました。北側から、カラス大のつばさの尖った鳥が猛スピードで近づいてきます。ハヤブサです。ハヤブサはぐいぐいと上昇して急降下し、海面の高さ1mの位置を水平に飛び、浅瀬をかすりました。ハヤブサは脚にスズメ大の小鳥をつかんでいます。上空を飛ぶハヤブサを撮った写真の上に、ばらばらになって逃げ惑う数羽のチュウシャクシギが写っています。このシギは逃げ足が速いのですね。

さて、チュウシャクシギなどの水鳥は、広い干潟でばらばらにえさをあさっていたのが、潮が満ちて、休息できる海の杭があるこの場所に集まってきたのです。ハヤブサもこのことを知っていたのでしょう。小櫃川の河口にある盤洲干潟ではこのようなドラマがしばしば見られます。この海岸のように水鳥の豊富な干潟はほんとうに少なくなりました。大切にしたいものです。

参考文献 成田篤彦2017房総の草木虫魚256号チュウシャクシギ 千葉日報6月18日号。千葉県の保護上重要な野生生物 一千葉県レッドリスト-動物編2019年改訂版 千葉県。  
(文・写真 千葉県立中央博物館ボランティア 成田篤彦)

#### MEMO チュウシャクシギ チドリ目シギ科 全長約42cm

ユーラシア、北米大陸北部のツンドラで繁殖。冬はアジアの南部、オーストラリアなどに渡る。千葉県には春と秋に飛来するが、特に春が多い。主にカニやゴカイ類やアメリカザリガニなどを食べる。千葉県要保護生物。

### しいむじなの由来



房総の山のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

### 編集後記

昭和四十年代に小学校時代を過ごした私は、通学途中によくオオバコで草相撲をしていました。その時思ったのは、「強くて逞しい雑草」。オオバコは逞しいだけでなく、多様性があり、目立たないけれど繊細な花を咲かせていたのですね。「平成」が終わり、新しい時代が始まりました。今年度の房総の山のフィールド・ミュージアムは、森の植生や昆虫のことなら何でも知っている尾崎煙雄に加え、地形が専門の八木令子、鳥類学の平田和彦(中央博の令和コンビ?)が担当します。よろしくお願ひします。(八木令子)



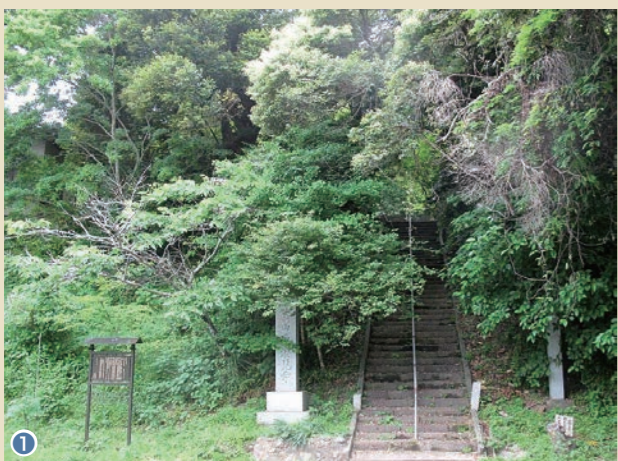
突然ですが、「文化財」という言葉から何を連想しますか。寺院、神社、仏像、お祭り、貝塚などを想像したみなさん、もちろん正解です。では、文化財になっている「森」が存在するのをご存じでしょうか。今回はみなさんが意外と知らない、「文化財としての森」のお話をしたいと思います。

おそらく「天然記念物」という言葉を一度は聞いたことがあるでしょう。「トキ」や「オオサンショウウオ」などの希少な生き物を想像する人もいるかもしれませんが、実際には、天然記念物とは文化財保護法や文化財保護条例等によって定められた文化財のカテゴリーのひとつで、学術上価値が高い「動物」「植物」「地質・鉱物」のうち、国や県、市町村の自然を記念したものと定義されます。その中で植物に関しては、樹木の木々などのほか、森そのものも天然記念物に指定されます。ですから、天然記念物に指定された森は「文化財の森」とみることができま

ます。

千葉県では、長南町にある国指定天然記念物「笠森寺自然林」が有名です。この森は、重要文化財の笠森寺が建立された延暦年間(延暦…七八二年〜八〇六年)から伐採が禁じられてきたと伝えられており、スタジイ、アカガシ、アラカシなどからなる常緑樹のほか、伐採されることなく今日まで守られてきたスギの豊富なシダ植物が生育しており、コバノカナワラビ、ホソバカナワラビ、ヘラシダなどが多く見られます。本堂までの遊歩道沿いの崖には多様なシダ植物が生育していますので、参拝の前にゆっくり観察しながら坂を上ってみるのも、面白い楽しみ方ではないでしょうか。

一方、千葉県が指定したもので、一宮町の軍荼利山植物群落などがあります(写真①)。この植物群落は、信仰の対象として保護されてきた森で、スタジイを中心とした常緑広葉樹から構成されており、カゴノキ、キジヨラン、サカキカズラなどの暖地性植物のほか、カツモウイノデ、ハチジョウカグマなど県内では限られた地域にしか生育しない希少なシダ植物が生育しています。また、千葉県レッドデータブックにも記載されているハイハマボッサが生育しており



写真① 千葉県指定天然記念物 軍荼利山植物群落 (一宮町)  
写真② 林床に生育するハイハマボッサ (サクラソウ科)

(水野大樹)

コラム

房総丘陵の動植物(13)

森も大事な文化財

年)から伐採が禁じられてきたと伝えられており、スタジイ、アカガシ、アラカシなどからなる常緑樹のほか、伐採されることなく今日まで守られてきたスギの豊富なシダ植物が生育しており、コバノカナワラビ、ホソバカナワラビ、ヘラシダなどが多く見られます。本堂までの遊歩道沿いの崖には多様なシダ植物が生育していますので、参拝の前にゆっくり観察しながら坂を上ってみるのも、面白い楽しみ方ではないでしょうか。

一方、千葉県が指定したもので、一宮町の軍荼利山植物群落などがあります(写真①)。この植物群落は、信仰の対象として保護されてきた森で、スタジイを中心とした常緑広葉樹から構成されており、カゴノキ、キジヨラン、サカキカズラなどの暖地性植物のほか、カツモウイノデ、ハチジョウカグマなど県内では限られた地域にしか生育しない希少なシダ植物が生育しています。また、千葉県レッドデータブックにも記載されているハイハマボッサが生育しており

利用されたり、観光の拠点として利用されたりして、積極的な活用が図られることもあります。

今年(二〇一九年)は、天然記念物の指定制度史蹟名勝天然記念物保存法(一九一九年四月十日公布、六月一日施行)ができてから百周年、二〇二〇年は天然記念物第1号(千葉県では「成東・東金食虫植物群落」)、「太東海浜植物群落」の2件、いずれも一九二〇年七月一七日指定)の誕生から百周年にあたります。東京オリンピック・パラリンピックの開催と比べると、その認知度は極めて低いですが、百周年のいまこそ、文化財という視点で自然観察をするのも面白いかもしれません。

特集

オオバコ



踏まれ強いオオバコ

たいていの植物は茎が踏まれて折れるとその先は枯れてしまいます。ところがオオバコは踏まれても枯れません。オオバコには葉をつける地上の茎がなく、すべての葉は地面すれすれに生えています(写真②)。



写真② オオバコ  
写真④ ヘラオオバコ  
写真⑤ ヘラオオバコの花  
写真⑥ ツボミオオバコ

花だけをつける花茎は直立していませんが、草相撲に使われるくらいのも丈夫です。人や車が通る道では競争相手となる植物は踏まれて枯れてしまい、オオバコはそんな場所をひたすら占められます(写真①)。オオバコは踏まれることによって繁栄しているといってもよいでしょう。

オオバコの花

草相撲に使う花茎の先の方にツクシの頭のような部分があります。あれがオオバコの花序です。花序とは花の集まりのことで、オオバコの場合には穂状花序といい、花茎の周囲に柄のない多数の小さな花がらせん状に並んでいます(表紙写真中央)。一つ一つの花は二ミリ程度と小さいながら、ちゃんと雌しべと雄しべがあります。一つの花の中では雌しべが先に、その後には雄しべが伸びます。そして花は花序の下から上に向かって順番に咲き上がります。そのため、花序の中では上の方に白いブラシ状の

雌しべが見え、その下に赤紫色の葯を先につけた雄しべが見えます。葯とは花粉の入った袋です。花序の中では必ず雌しべの方が上に位置することになり、雌しべが自分の花粉を浴びにくくする工夫のように思われます。目立たない花ですが、よく観察すると進化の妙を感じることができ

外来のオオバコ類

オオバコはオオバコ科オオバコ属の多年草で、日本全国のみならずアジア大陸東部から南部に広く分布しています。

ところが近年は外来のオオバコ類が日本各地で分布を拡げていて、千葉県も例外ではありません。千葉県にはオオバコ属の外来種が四種知られていますが、最近房総丘陵の人里で目につくようになったのがツボミオオバコとヘラオオバコの二種です。いずれも県内の平地では七十年以上前から記録されていました。山間



写真③ 三島小学校周辺で採集したオオバコ類の比較。左から、オオバコ、ツボミオオバコ、ヘラオオバコ



写真⑦ 開花したツボミオオバコ

部ではここ二十年ほどの間に急に増えた印象があります。

ヘラオオバコはヨーロッパ原産の多年草です。細長いへら形の葉が特徴(写真④右)で、オオバコとは違って踏みつけの少ない場所で他の草と競うように生育し、その花茎は五センチ以上の丈に伸びることもあります(写真④)。ヘラオオバコの花は長く伸びた雄しべの先に白い葯が目立ちます(表紙写真左)。オオバコと同様に、雌しべが雄しべより先に成熟し、穂状花序の下から上に向かって順に咲きますが、雌しべは目立たず、雄しべだけが目立ちます。そのため、ヘラオオバコの花は白いリングのように見えます(写真⑤)。

ツボミオオバコは北米原産の一年草(写真⑥)。オオバコの花は長く伸びた雄しべの先に白い葯が目立ちます(表紙写真左)。オオバコと同様に、雌しべが雄しべより先に成熟し、穂状花序の下から上に向かって順に咲きますが、雌しべは目立たず、雄しべだけが目立ちます。そのため、ヘラオオバコの花は白いリングのように見えます(写真⑤)。

ツボミオオバコは北米原産の一年草(写真⑥)。オオバコの花は長く伸びた雄しべの先に白い葯が目立ちます(表紙写真左)。オオバコと同様に、雌しべが雄しべより先に成熟し、穂状花序の下から上に向かって順に咲きますが、雌しべは目立たず、雄しべだけが目立ちます。そのため、ヘラオオバコの花は白いリングのように見えます(写真⑤)。